

かもしか

少年の間に
知るべきこと
多し
一
恭



1986 / 8

かもしか川柳社

第二回陸奥湾駅伝県下川柳大会

▽とき 九月十四日(日) 午前十時
▽会場 蟹田町 海水浴場休憩所
▽会費 一五〇〇円(昼食・発表誌等)
▽宿題 「湾」「たすき」「野菜一切」

▽選者 飛鳥七味 杉山竜太 船橋三郎
石沢三善 村上志朗 佐藤遊子
伏守和穂 松原とおし
柳谷かなめ 松尾喬介
(題との組合せは当日発表)

▽席題 三題 各三句
▽アンカー吟 五吟吟 五句以内
柏葉 みのる 選

▽投句 拝辞いたします
▽大会方法

①出席者の数により数チームに分れる
②出席者は受付順の抽せんにより、各チームの選手になる

▽賞 各チームの上位五名の得点合計により、優勝チーム全員に呈賞。他に三才賞、個人賞二十位までに呈賞。

主催 陸奥湾沿岸川柳懇話会
主 催 陸奥湾沿岸川柳懇話会
当 番 おかじょうき川柳社

第三十五回東北川柳大会あんない

▽とき 九月二十一日(日) 午前九時半
▽会場 宮城県婦人会館5F大ホール
▽会費 (仙台市錦町二丁目) 一五〇〇円(昼食等)

▽宿題と選者 各題二句 雑詠一句

「肩」 宮城 工藤とも
「ワンマン」 福島 佐藤義人
「群がる」 山形 鹿野五郎
「重い」 秋田 畑伯史
「ずれる」 岩手 盛合秋水
「ノート」 青森 三浦宗一
「雑詠」 宮城 菅原一字
「雑詠」 千葉 藤島茶六

▽賞 総合三十位まで 各題三才賞
▽投句締切り 八月三十一日
▽投句者賞 十位までに呈賞

▽宿泊申込み 九月十日まで事務局へ
▽宿泊料 四七〇〇円

▽宿泊先 宮城県婦人会館
▽事務局 980仙台市大町2-1-20
仁田耕一方

主催 河北新報社 川柳宮城野社

七月号 もくじ

第4回川柳Z賞特集

正賞	西山茶花	二
準賞	海地 大破	三
選後感	柴田 午朗	一〇
	寺尾 俊平	一〇
選後感	泉 淳夫	一〇
	時実 新子	一一
選後感	杉野 草兵	一一
	尾藤 三柳	一二
選後感	山村 祐	一三
	橘高 薫風	一四
選後感	片柳 哲郎	一五
	北の角笛⑦	一七
	小野 公樹	一七
	ちかめの風景⑥	一七
	岩崎真里子	一七
	かもしか集(202)	一八
	蒼玉抄(161)	二三
	コーヒーション①	二五
	宮本めぐみ	二五
	わたしのスクリーン①	二六
	野沢直悟	二六
	SENRYU・JYOHŌ	二七
	第15回かもしか誌上全国大会案内	二八
	表紙版画③	表一
	北野 岸柳	表一
	太田 正末	表一
	カット①	表一
	柏葉みのる	表三
	柏亭独語⑤	表三

第四回川柳Z賞 西山茶花さん(岡山)に栄冠

川柳Z賞選考委員会

第一次選考

☆宮本 紗光 すいせん
・行本みなみ・古谷 恭一・佐藤 岳俊
・海地 大破・岡田 千茶・高田 政旗
・武村 一美・西 山茶花・岩崎真里子
・吉田 州花

☆柏葉 みのる すいせん
・中野 要・武村 一美・西 山茶花
・吉田 州花・佐藤 岳俊・長町 一吠
・岡田 千茶・西条 真紀・濱田 玲郎
・桐越 千絵
☆小野 公樹 すいせん
・樋口 仁・情野 千里・西 山茶花

☆西山 金悦 すいせん
・古谷 恭一・石田 寿子・高田 政旗
・芳賀 弥市
・加藤かずこ・行本みなみ・都築 裕孝
・御堂 一美・海地 大破・加藤 久子
・西谷 恭一・石田 寿子・高田 政旗

・松村 育子・山本 礫・佐藤 岳俊
・中野 要・庄子 喜一・武村 一美
・助川 助六

☆工藤 寿久 すいせん
・金山 英子・桑野 晶子・菊池俊太郎
・樋口 仁・野沢 省悟・海地 大破
・海野 善美・沢田 清敏・玉木 柳子
・神谷三八朗

☆高田 寄生末 すいせん
・小石 漫歩・新井 笑葉・桑野 晶子
・桐越 千絵・嘉瀬信柳詩・土屋 桜子
・佐藤 幸子・宮本めぐみ・井上 虎風
・石川 重尾

第二次選考
★寺尾 俊平 すいせん
①海地 大破③西 山茶花⑤樋口 仁
②菊池俊太郎④西条 真紀
★柴田 午朗 すいせん

①海地 大破③野沢 省悟⑤金山 英子
②岡田 千茶④西 山茶花

★時実 新子 すいせん
①野沢 省悟③桑野 晶子⑤岩崎真里子
②情野 千里④高田 政旗

★泉 淳夫 すいせん
①西 山茶花③古谷 恭一⑤西条 真紀
②長野 一吠④濱田 玲郎

★尾藤 三柳 すいせん
①桑野 晶子③都築 裕孝⑤井上 虎風
②野沢 省悟④加藤 久子

★山村 祐 すいせん
①西 山茶花③土屋 桜子⑤西条 真紀
②菊池俊太郎④桐越 千絵

★橘高 薫風 すいせん
①海地 大破③濱田 玲郎⑤佐藤 岳俊
②長町 一吠④菊池俊太郎

★片柳 哲郎 すいせん
①西 山茶花③濱田 玲郎⑤武村 一美
②長町 一吠④行本みなみ
★杉野 草兵 すいせん
①行本みなみ③武村 一美⑤古谷 恭一
②海地 大破④吉田 州花

第四回川柳Z賞・正賞

(賞金十万円・津軽塗楯)

あだし野残照

岡山市 西 山茶花

心に響く言葉と永い旅をした
 わが構りなまぐさければ 雪干
 珠玉よと思ひ 露とも思ひ捧げ持つ
 初恋の人 青春と咲いている
 春雨に煩惱具足の髪光る
 咲き満ちた花が天窓くらくする
 未練でしようか未元の運河の光るのは
 叶うなら葡萄の町のピアノ弾き
 あやとりの縄が響くあばら骨
 止めて下され散り放題に墨葉が散る
 姉が化身よ足摺り岬の女郎花
 ほうほう蛍ホウホウ今こそ光らねば
 花があわれで馬むしゃむしゃと花吹雪
 三月月に追慕のときを刻まれる
 たましいをこぼしながらも月の橋

たれかれは火を焚く遊び 天の川
 北の蛍に誘われまして火を摘みに
 天地病む花も情けも吹き曝し
 晦夜や紙の蓮華のひらひらす
 思いに負けて秋を揺れだす弦楽器
 胸中に駄馬の一匹飼ひごろし
 破魔矢欲し 今端的に言つならば
 昏れて来てここな小指の役立たず
 げんまんの指しらしらと夢に降る
 橋はまぼろし泪を点す地の蛍
 さて何と書く薄墨をふくませて
 憎し恋しと枕に詰める菊の花
 明日を預ける亡母によく似た観音さま
 桜に響く石屋が墓石を刻む音
 次の世は蝶で蜻蛉で舞わんかな

受賞のことば

西 山茶花

「Z賞に応募してみませんか」たしか俊平さんが声を掛けて下さったように記憶しています。Z賞には強い憧れがありました。がどうせ駄目だろうと思つて気が持たず声を掛けられる迄は応募など思つたこともありませんでした。前回、みなみさんが次点だったことなど聞き、まるで後飛びに飛び込むように応募しました。

初めの間は出句の中の削りたいような句のことばかり心底に沈澱していましたが、どうせ駄目だろうと思つて心が濃くなるばかりで最近では諦めていました。

今日は突然受賞の通知が届き、飛び上らんばかりです。

川柳を作りはじめてから二十年余、こんなに心から嬉しいと思つた事はありません。今後は賞の重みに押し潰されぬよう胸を張って作句に励みたいと思つていきます。どうも有難うございました。

第四回川柳Z賞準賞

(賞金一万円)

土佐市 海地 太破

さびしくて茶碗をチンと鳴らすなり
 停年の父は新芽へ咳をする
 ふるさとへゆるりゆるりと腸が伸び
 胃袋が覚めぬどこかで鶏が鳴く
 一年過ぎて一年老いるよもぎ餅
 一椀の重さを抜けて鬼に遇う
 嘘つきのさびしい嘘と黄昏る
 ゆるい靴はいていくさが嫌になる
 燕の巣夫婦こっこをして別れ
 某日のめし粒はみな逆立てり
 一疋の鬼を脳天から剥がす
 打ち水の先で斃れる男あり
 ふるさとが遠くてさむいあばら骨
 たましいと旅を続ける油蟬
 曼珠沙華がくんと折れて敵ばかり

向こう岸へ投げたさびしい石の音
 雪の白さに一度は騙されてみたが
 ペテン師に耳かき一個残される
 ふるさとをとうに忘れた象使い
 晩年の悔い一本の木を枯らす
 てのひらを返すと消えていた生家
 晩年の絵をとりはずし放浪へ
 生き恥の限りを尽くし屋根の上
 一族が流れていった赤トンボ
 幾度転んで父の墓まで辿り着く
 満月の猫はひらりとあの世まで
 とむらいのあの唐辛子が軒に
 火葬場の骨の行方を問うてみる
 蠟燭を消していくのは亡父の息
 弓を引くかたちで骨になっている

正賞	23点	西	山茶花(岡山)
準賞	22点	海地大破(高知)	
秀逸	13点	野沢省悟(青森)	
佳作	12点	桑野晶子(北海道)	
	8点	長町一吠(岡山)	
		行本みなみ(岡山)	
		古谷恭一(高知)	
	6点	菊池俊太郎(東京)	
	5点	濱田玲郎(長崎)	
	4点	岡田千茶(岡山)	
		武村一美(岡山)	
		情野千里(兵庫)	
	3点	都築裕孝(宮城)	
		土屋桜子(静岡)	
	2点	西条真紀(岡山)	
		高田政旗(北海道)	
		加藤久子(宮城)	
		桐越千絵(北海道)	
		吉田州花(青森)	
	1点	樋口仁(三重)	
		佐藤岳俊(岩手)	
		金山英子(兵庫)	
		岩崎真里子(青森)	
		井上虎風(大阪)	

秀逸

青森市

野沢省悟

無限 残照

無限抱擁鬼苦として角を得し
闇夜から闇をもらって僕を煮る
乳房ひとつを求めんとして裂く一樹
動脈で創るは大菌なお犬歯
わがマグマあふれて苦き苦き歯牙
歓喜天の臉の裏の芒原
子を得ては芒野の中道迷う
いっぽんの枯木いっぽんの父の脊柱

秀逸

札幌市

桑野晶子

軋生や 葡萄も梨もおしくらまんじゅう
柿を剥くむいているのかむかれてるのか
熟麦のノート開けば邪宗門
さんま焼く火のいろ駐車禁止地区
山彦の山にならんと月明列車
まないたも葱も女も春景色
水はしょうの目めぐり剥がす ていねいに
荷をほどく鉄降るまちの葉っぱの夫婦
リラ冷えの肋に咲いたサンローラン

更紗木綿の藍深ければ夕やけ小やけ
街路樹の耳やわらかな連番感
羊蹄も画廊も昏れて一弦琴
棒だら下げて一夜二夜の鈍色河口
えんぴつが短かくなってゆく夜景
ささめ雪双手に包むじゃがたらお春
雪の表れ まさかりかぼちゃと助走する
胃の中に見え隠れする破戒僧
風花や 写楽だったか あなただったか

佳作

岡山市 長町一吠

荒原や我身に刺せり風ぐるま
心寒く〜とんどん放つ流し雛
すべて幻想だった冬の心に蓋をせし
芸なき男と芸なき女や冬に入る
喪の深き野鳥か夜を啼きとせり
恥ひとつ重ねて冬の首垂れむ
一罪一灯ろうそくの数おびたゞしき
道を聞く冬ろうそくは答えもせず
来世を信じる妻と信じない私の朝のコーヒー

佳作

岡山市 行本みなみ

喬木に吊す遊びを春という
春色に母のみならず這い回る
猫の木に一輪咲いて姉が逝く
人を裁いた切株なのか 濡れている
右左り火の粉が舞うて春にて候
死に急ぐ蝶か 技巧もなく抱かれ
蝶の翅むしる心が一つあり
透きとほる一匹を購う薄情け
まじめに狂って玉葱の皮剥いている

佳作

高知市 古谷恭一

長男に生れ落ちたり草を薙ぐ
むっくりと午起き上がる神楽笛
首のない鶏が駈け父の視野
手漣和紙 母がこちらをふり向いた
うしろから中に吹いてくるものよ
さくららぶきを漣き込む椀 わが椀
春の闇 ごくりと真珠嚙み込めり
櫓の鈴聞こえる眠ってはならぬ
驚いて三面鏡の中に立つ

佳作

長崎県 浜田玲郎

藁の馬に師よ師よと藁の馬
亡母に揚げる冬の花火の虚しかり
枯野満月亡母を待たせ亡父を待たせ
風に哭かれ二月の木馬仔ちつくす
見えかくれして二月の鬼の哭く
如月の一枚の絵とひとつの咎
冬満月男キラキラ嘘を言う
言つてならぬことあり冬の海光る
憎みきれずに冬の銀河と流れけり

佳作

岡山県 武村一美

絵ろうそく女を盗む風盗む
愛をけてひとり好きな小抽斗
螢火をすくうはかなさをすくう
風と炎をぬけて逢つては別れては
逢つたびにすこし情けの灯をもらう
春愁やふいにあなたがはしくなる
二界の輪廻を契る虹の果て
新月の闇やわらかき腕の中
千の髪ほどいてからを抱かれし

佳作

東京都 菊地俊太郎

今日も止気で亀を転がす
下唇に受ける真冬の辞令
熱湯消毒少し自分が見えて来た
父を誘う暗がりのキャッチボール
湿った海苔につきまるとわれる家族旅行
水はけの良い街角で遺書を書く
哀れっぽい乞食の役が空いている
ぴちぴちした老人たちのいる穴ぐら
挨拶抜きで巻きついてくるガゼ

佳作

岡山市 岡田千茶

花びらは不倫のおい寒椿
冬波濤密会ばかりそそのかす
女傘惚れて候とは書かぬ
別れては逢つては傷を深くする
何の痛みで朱い手袋買つ男
極印を押せとせがんだ山椿
口づけは幼きままで人妻で
禁断の実に触れし掌よ白昼夢
ひしと抱けばけもの一気に息絶えぬ

佳作

姫路市 情野千里

舌頭に斬り込んで来る二月雪
逆上の力で春を乗りこなす
恋にも酔わん今黎明の花の色
人恋つは尿意に似たりふみとどまれぬ
なめくじは浅く重なる昼の闇
桜が咲いて翔びやすそうな空になる
酔で洗うまたあやふやな夢の彩
胸ゆれて三尺先の桜散る
安穩の唾液の甘さよ恋成らず

佳作

宮城県 都築 裕孝

日めくりのこのにぎやかな処刑室
食卓にきちんと父の首をのせ
カラオケは父の手と足かもしれぬ
連休の一日やはり墓を掘る
定刻のバスを見送る偏頭痛
減塩三日父の喜劇が始まりぬ
ポケットの穴をこぼれる道化たち
新しいカバンを買って花を入れ
夕刊とひとりの木偶を折りたたむ

佳作

島田市 土屋 桜子

終わらないパズルの底へ落ちた鍵
底のない胸の器にそそぐもの
病んでいる枕で鬼とする話
オレンジのつや照り返す罪の色
迷路を脱けた笑い上戸の犬
言い訳を聞かぬ牡丹と蘭に居る
樹を抱いて一夜の夢を解き明かす
恋と知らずレモンを囁っている女
紅色の密かな農を髪に差す

佳作

岡山市 西条 真紀

生き継いで冬蠟燭のあたたかし
恩愛の四十なかばの裸身かな
重ねあういのち一途に信じたし
仏さまこの身を抱いて下さるか
かいたに眠るおまえ誰れの子 仏の子
問うなかわれが流木のそのゆくえ
くみ尽すわが罪障の尽きるまで
誰がための蠟ゆらゆらとひとすじに
全身であなたを仰ぐ 秋つらら

佳作

札幌市 高田 政旗

某日や頭上をおそう雪の墓
梅十しの酸っぱいことを語り合おう
少しだけはしゃいで見せるタンバリン
正面に棲んでいるのは脆き貌
かけだしてみるはかはない冬の馬
ややあって冬木に生える手と足と
さくら咲くつしろはみないことにする
胃の中で止ったままの春の汽車
かすかに雨が降っている耳の中

佳作

岩沼市 加藤 久子

深層へ下りてゆくのは銀の匙
冷めた言葉をころがしてみるアルルカン
生温かい闇から生えている手足
パセリセロリ女の助透けてくる
ぬるま湯にがんじがらめの花の首
蒼い鱗をはらはらおとす受話器のなか
父の樹を倒す優雅なリアリスト
カルチャーセンターをでるおしゃべりな液体
水栽培の男と迷うモザイク画

佳作

北海道 桐越 千絵

春を焼く匂いに遠くなる乳房
坂下りて道連れになる白い馬
花言葉耳の形に湧いてくる
春の絵に榭山行きのバスも発つ
尻尾ゆさゆさ北に墓地買つ飯茶碗
結納を交わして長い橋かける
神の掌にも銘銘皿は配られる
一枚の紙に女は橋かける
わたくしの貌を絵皿に盛り分ける

佳作

青森市 吉田 州花

ひとひらの抒情におぼれゆくはこべ
会至百定離 人みな恋し輪をぐる
肉体を持たぬ羅漢へ恋すだく
逢えぬまま 夢は無色の八重桜
幻聴に酔うおだやかな花筏
夢がそこにある 魚がこげている
てんでまり 咲いて散る間のはなやぎを
暮れいそぐ君もどんぐり片道切符
夏の間の片掌のいのちくみつつける

佳作

四日市 樋口 仁

魚の骨を丹念に出し喪が明ける
春の絵に群がる縄の切れ端たち
駅裏で探す落としてきた昨日
昔々で始まる坂道の家族
キリストを身ごもる橋の途中で
敗色が濃くなる夕暮れの花屋
生活を登り詰めると妻のこめかみ
花道を通れなかった縄電車
チューブから絞り出される朝の首

佳作

岩手県 佐藤 缶俊

米櫃の角ひからびた父の魚
泣きながらひよっとこの面踊り狂う
煤の火棚ばかり浮かぶ 冬の月
雪ひらりひらりいのちを積み重ね
情ひとつ雪に孕んでゆく農婦
父の背の畦をはずかに越えていく
泣いて泣いて泣いてひとつぶ米受胎
鬼の面背にびょうびょうと餓死供養
がらがらと冬の雨戸を閉めていく

佳作

神戸市 金山 英子

石つぶて 姉より先に子を成せり
ススキ光る あれは狐に似た姉で
姉もトカゲも 光り忘れて死にました
仮りの世も 仮りの母なる我がかげろう
哭けば母 この憤煙の手を放つ
報復絶倒 この世の母を占いぬ
生涯母を 馬屋に残す木の柱
醒めて喰らう 母が醒めてる
祈りいわずに 母を吐く はは

佳作

弘前市 岩崎 真里子

蝉が死ぬ 明日わたしも旅に出る
夏の詩 握りしめてる蝶の羽
生も死も選び抜かれて冬を待つ
石鬼 やがて望みの 雪うさぎ
揺れながら一本道の冬を行く
木枯しに合わせて母が菜を刻む
藍を持って 愛を持って冬つつれ刺す
雪野原 お地藏様に柿がある
愚かさを愛した母の胸の位置

佳作

堺市 井上 虎風

宙吊りの鳥にジャズが吹きすさぶ
魚は飢えのかたまりになり そして
父の背は海でいのちが沈んでいる
馬は微熱をかくして踊る馬鹿囃し
にんげんの倒れる音で目を覚ます
何枚も鏡を買う パントマイム
むすんでひらいて昼のコントが弾んでいる
もののはずみでときどき折れる首の骨
歩けば炎パンの残りは残しておく

第一次選考

通過作品五句抄

— 佳作以上は除きます —

名古屋市 御堂 一美

能面を打っているのは男だな

天窓にオブジェがいつも置いてある

鉛色の夢果てもなき啄木鳥

孤に徹すいまがわたしの正念場

山頭火の風超えられずひとりの愚

札幌市 加藤 かずこ

蛇口から漏れる女の軽い飢え

磨かれた皿に偽証の愛を盛る

青い絵を探す女の長い冬

何時からか胸に棲んでた黒トカゲ

髪切った女を狂わす風の櫛

仙台市 芳賀 弥市

詩を売ってフランスパンは固過ぎる

定食の鯉お前は肥えてるな

掃除婦と定刻に遇う瘦せた馬

近寄ると鼻もホクロもしゃべりだす

本日は晴大裏切者がいる

千葉県 小石 漫歩

満天の星おし黙る除夜の鐘

雲上風に逆らってみよ見てるから

童心に還ったなど嘘を言っ

羽衣を纏わず翔んでみた女

生き甲斐を問われてしどろもどろする

札幌市 嘉瀬 信柳詩

起承転結 お湯が静かにわいている

蟹ゆでてもう安楽死考えぬ

時刻表とおりに寒いバスが来る

髭剥ってからの瑞々しい会話

棒鱈といっしょに吊す北の慈悲

京都市 山本 磔

さざり上捨てる憎しみなどはない

こっけいな泪を作らねばならぬ

目測を誤る階段ばかりある

炎に縋り炎に突き放されて来た

混沌と瓶のごとくに転るか

一宮市 沢田 清敏

知恵の輪を解き終えてから討たれよ

幾度叩けば壁は答えてくれるのか

血が温うて人非人にはなりきれぬ

青い眉 風の矛盾を見逃せぬ

向う岸の絵が少年を狂わせる

四日市市 石田 寿子

透析やまた子育ての旅がある

血の濃い順に流れていった老母の旅

無器用な男の粥を食べている

刈り入れがすむと男が消えている

電話が遠い悪いことでもしているな

明石市 助川 助六

アドリブをいれると笛が赤くなる

十個人形に磨きをかけてから別れ

誤解したままの男の通夜に出る

こめかみのほくろが罪を抱いている

人妻のあたたかい眼に油断する

津島市 中野 要

一つは炎で一つは雪を抱く乳房

いっときの思いで首を渡すまい

自画像の影も光りも「天に似る

秋の帽子に夏を忘れる風よ吹け

少し気弱になって聞いている雨の音

大宮市 松村 育子

香水一吹き女の装備整いぬ

夢はただゆめでしかない痴愚の舞

ドンキホーテを自任したとて女

間道も知り囚われの森を出す

一步譲ると女にはない出番

札幌市 佐藤 幸子

望まれて落ちたわけではない林檎

木枯しがだんだん晶で唾になる

月夜の蟹が何も言わずに通り過ぎ

いい子いい子ポプラがひよいと抱き上げる

戦いがすんでしばらく繭の中

静岡市 石川 重尾

街を出て騙され易い鳩時計

打ち解けてやっとう尻尾が見えてきた

坂転げ落ちてても父の死に会えぬ

人によさしく人にきびしく釘は打たれ

一本の釘が打たれて街のいちにち

仙台市 宮本 めぐみ

よく切れる鋏が友のポケットに

自画像を捨てて見に行くゴッホ展

求人欄私も斬られ役になる

友の部屋に予期せぬ明日の鏡など

勝負師の爪が逆さに生えてくる

旭川市 新井 笑葉

少年の恋まっさらな遠火花

秒針の戻りききみにそそのかす

人真似の猿で虫歯が多くなる

ネガばかり貯める素顔が死んでいた

悪を育てて一本の樹が枯れる

仙台市 庄子 喜一

一日一善私の罪をなしくずす

エキストラがわりに招待状がくる

尾を振って僕はたよりにされている

春つらら祝いつかれたのし袋

底なしの沼で噂が湧いてくる

名古屋市 神谷 三八朗

ひとりひとりに呼び合って旅立つ声

物語りの始まる白い椅子である

橋工事完了屠殺場は一本道

捨て台詞障子は白く貼ってある

人は時を信じてバス停でバスを待つ

郡山市 玉木 柳子

死の灰が降ってもパンは買いに行く

音もなく来る死神が軽すぎる

火葬場で白い思想を渡される

懺悔から始まる鬼の紙芝居

真相はもう聞き出せぬデス・マスク

静岡市 海野 善夫

満開の花の後ろの精神科

父の樹をいびつに枯らす赤い櫛

真相をつたう危険なオルゴール

冬の樹を登りつめてるカタツムリ

すらすらと馬鹿になりきるめしを食う

西 山茶花さんの略歴

・昭和28・29年頃、胸部疾患で入院療養中、川柳に出会う。

・再婚のため10年余り中断。

・昭和44年頃より、また作句をはじめ、「ますかっ」と「川柳平安」に投句。

・昭和49年度ますかっと賞受賞。この年

・昭和50年「川柳展望」の会員となる。

・昭和50年「藍」の同人となる。

・昭和51年、岡山県文学選奨（川柳の部

受賞。

・昭和52年、処女句集「山茶花」発刊。

・昭和57年1月より「ますかっ」と「誌の

「芳園園」選者となる。

・昭和59年度、川上三太郎賞受賞

・昭和61年2月、第「句集」『堆朱』発刊

・住所、岡山市田益二一四七一

○ ○ ○

★寺尾俊平、泉淳夫両氏は、療養中の為に選句のみをお願い致しました。両氏の健康が快復されることを祈ります。

★募集要項をご案内くださった各誌に心よりお礼を申し上げます。

選 後 感

柴田 午朗

新しい傾向の川柳作家が少しずつ増えて
にぎやかになった。若いころ、いわゆる詩の
本を読んだ記憶があるが、当時盛んにかさ
れたレスブリ・ヌウボウ(新詩精神運動)と
か、ノイエ・ザハリヒカイト(新即物主義)
とかの影響が、また現代詩にも根強く影響し
ているという。われわれの川柳も、こうした
現代詩の影響を受けていることに異論はない
が、しかし川柳作家達は、あくまで古川柳の
傳統を守るといい、五七五の定型を大切にし
ている。川柳という名称を冠する以上、これ
は当然のことかもしれないが、昭和初年から
いわれた川柳の性格は、諷刺であり、穿ちで
あり、ユーモアであった。古川柳の傳統を守
るといふならば、こうした性格を離れること
にもまた未練の残るのはやむを得ない。

しかし現代詩の影響を受けた川柳作家達は、
作者の個性、詩精神などと、これまでの川柳
傳統との間に挟まれて、苦悶を続けていると

いわざるを得ない。川柳が近代詩の影響を受
け、難解になることはやむを得ないという考
え方と、川柳はあくまで平易に日常語とい
う考え方との間で苦悶しているというのが実
情ではあるまいか。

この度の応募作品を読むと、この問題はす
でに解決済みという割切った気持の作品と、
個性を大切に、また詩も川柳もその精神を損
なわぬようにと思いつつ、若干右顧左眊して
いると想像される作家とがあったが、このこ
とは筆者自身が、なお迷っているもので、こ
さらそうに感じるのかもしれない。

第一席の海地大破氏、第二席の岡田千茶氏
の作品を読むと、この作者も私を感じている
ようなことを充分に意識しつつ作句している
であらうと思われ、共感するものがあつたの
で、あえて点をいれた。

第三席の野沢省悟氏の作品には、作者の思
念を表現すべく、なるべくそれに遊離しない

しきとめたもの

時実 新子

期待をこめて封を切る。

あツと目のみはらせる作家は出ないか。Z
賞にそれ待つの私だけではないだろう。

そして二十四時。
にんげんの真実はつきとめた思いでいる。

一席 野沢 省悟作品

八角形から方角形に、四角から三角にと、
省悟作品は人とは逆を辿ってきた気がする。

無限抱擁鬼苦として角を得し
無限残照一匹の鬼死ぬるを得ず

の二句にはさまれた数十句。
ここには作家野沢省悟の「現在」が過不足
なく提出されたと思つ。

これ以上ヨロイを着る必要もなく、これ以
上あそんでみせることも無用。重すぎず軽す
ぎず、真実の真にふれた。ありがとう。

二席 情野 千里作品

靴一足 美味なるものごとく在り

みみず死ぬ長屋育ちの視野の中

千里作品の特異性は自転車曲乗りに似て
いる。腰がいのちの危いバランス。姿定まれ
ばこれほどみごとく景色はないが、笑つたと
たんに車輪が泳ぐ危険をはらむ。今後この作
者とその危険度をどう処理していくか。大方
の注目を集めるところであらうと思つ。

三席 桑野 晶子作品

ふしぎな魅力を今回も見せてもらった。読
むこと五回、どうしても捨てかねる晶子の世

界であった。独特のリズム感覚は舌をはみ出
すが、すべりすぎる句に較べるとき、ペパー
ミントのさわやかさがある。

風花や 写楽だったか あなただったか
編集後記 雨はいつから穏やかに

四席 高田 政旗作品

句語の発見に苦心されたのではないかとい
う感じを抱いた。

第四席の西山茶花氏、第五席の金山葵子氏
の作品を読むと、一転して、いかにも作者の
詩、作者の川柳という感じを持った。

それぞれみな苦心の作であるが、大切なお
とは、古い伝統を背負う川柳と、新しい詩
精神とが、どのように調和されるかが問題だ
と私はおもつ。

寺尾 俊平

- 第一席 海地 大破(土佐)
- 第二席 菊池 俊太郎(東京)
- 第三席 西 山茶花(岡山)
- 第四席 西条 真紀(岡山)
- 第五席 樋口 仁(三重)

泉 淳夫

- 第一席 西 山茶花(岡山)
- 第二席 長町 一吠(岡山)
- 第三席 古谷 恭一(高知)
- 第四席 浜田 玲郎(長崎)
- 第五席 西条 真紀(岡山)

しばらくは一つしかない雨の椅子

棒倒しこの世を少し楽しもう

作者の一方的な物の捉えかたが大方をうな
ずかせるといふのは大きな財産だと思う。平
凡な共有性とはわけがちがう。それと、もう
一つの財産はペーソスである。

五席 岩崎真里子作品

生も死も選び抜かれて冬を待つ

北に住む人のこの一句が、さいごまで離れ
てくれなかった。妙にうますぎないところが
よい。

他に心に残った作者は、海地大破、井上虎
風、芳賀弥市、松村育子、岡田千茶、菊池俊
太郎、長町一吠、行本みなみの諸氏。

杉野 草兵

- 第一席 行本 みなみ(岡山)
- 第二席 海地 大破(土佐)
- 第三席 武村 一美(岡山)
- 第四席 吉田 州花(青森)
- 第五席 古谷 恭一(高知)

作品の個と作家の個

— 第四回Z賞作品に接して —

尾藤三柳

川柳はいつまでも川柳であってはならぬ、川柳はいつまでも川柳であることをやめてはならぬ——一見背反するかに見える二つの命題は、実は一つのものであり、その間におかれて、川柳を捨てようとするのが、より川柳に縛られることである歴史を、わたくしたちは、もう八十年も繰り返してきた。久しきにわたって、するりするりとこぼれ落ちてきた意地のわるい実体を、そろそろわたくしたち自身の手でつかみ取りたい——これは、現代川柳が斉しく抱えてきた非難であろう。

第四回を迎えたZ賞の第二次候補作品として手許に届いた四十四点、一三三〇章は、過去二回に比べると、かなりはつきりした手ごたえを感じさせてくれた。全体を通してすくい上げた掌に、確かに何ものかが残った。漣しても漣しても残る個の重さであり、富一がよく言っていた「密室」の微粒子のごときものである。

この四十四点の個の軽重や微粒子の疎密を計量して五点をすくい出すという難事をかちつつ、それがまさに難事であることの理由に、はたと思ひあたった。考えられないことだが、一三〇〇を超える個が、何とよく似ていることか。これが四十四の密室から別々に生れてきたものだろうかと思えた。次に気がついたのは、これは多分、作者の個ではなくて、作品の個ではないか。強いて言えば、現代作品が共有する個ではないか、ということである。日常的次元で物事が均らされていくように、作品もある水準に達すると、均質化へ向かうということだろうか。

いずれにせよ、この時点でわたくしの対応が決まった。作家自身の個が、より強く、より深く、より濃く感じられる作品を扱ぶこと——であった。

運営委員の熱意と、作品を寄せられたすべての作家に敬意を表しつつ——。

- 第一席 桑野晶子
- 第二席 野沢省悟
- 第三席 都築裕孝
- 第四席 加藤久子
- 第五席 井上虎風

桑野晶子さんには、前回、形式についていささかの苦言を呈したことを記憶しているが絵でも詩でも、出来たものと、完成したものとの間には大きな違いがあること（ポオドレエル）を、作品で証明してくれた。

野沢省悟さんの作品には、人生というよりもっとナマな生活の樹からにじみ出る樹液の苦さが、文語と口語を適度に織り交せた文体で凝縮されている。

都築裕孝さんの一連はおしなべて軽いが、作品を通底するユーモアに、捨てがたいノスタルジーを感じてしまう。

加藤久子さんの作品世界はたのしい。作品個々の断層やムラまでが、鑑賞者にユメをあたえてくれる。

井上虎風さんには、発想のユニークさがまづ目につく。将来性に期待して。

現柳界の抱える問題点

— 選后感 —

山村祐

戦後、特にここ一〇年二〇年の間に女性柳人の進出は質量ともに目覚ましいものがある。口語発想による、生活と密着した川柳の文体が大きく作用したと思うが、基本的には女性の人権確立が除々に根つき始めたからであろう。句のことは使いも洗練されてきている。ただ惜しいことに、うつくしいだけで、作者の想いの傳はってこない句の多いことだ。

人は独りでは生きられない。集団の中で暮している。従って社会のあり方で個人の暮らしも左右される。それ故、社会から眼を外らしていいはよい句は生れない。作者の視野が自分の家族や個人に限定されては、生活感情から生れる想いも類型化されてゆく傾向を生む。また、古川柳の特質の一つは、パロディや皮肉などの笑いによる批判精神にあったが、男性作家をも含めて、川柳から批判性が著しく淡くなってしまった（俳句の一部と較べてその点は現在のとこる逆転している）。

女性作家にはモノローグ的作品が比較的多い。しかし社会への視野が拡がれば、モノローグ的作品にも、作者自身は意識しないで、巧まずして社会性は滲み出てくるのだ。

次に、母を捨てに石ころ道の乳母車 時実新子 鳥籠へ男を帰しほうやれば

これらの句には自分を客観視する眼が活きている。今求められていることは、ことばに酔わないこと。それが柳界全般に必要となっていると思う。胸底に溜ったものを吐き出すことが川柳を含めて詩の存在価値なのだから。

次の問題は、柳界だけでなく各ジャンルを通じて（質的には多少異なる点もあるが）難解性への考察であろう。遠いことばとことばとをぶっつけ合う創造方法は、フロイトなどの学説を基盤にして、シュールリアリズムが確立した。しかしそのことばとことばの間には地下水のようなものが流れなければ効果は生れ

ない。難解に見えても胸を打つたため違いはそこから生れてくる。

俳句も川柳も庶民の詩だ。平易なことは深い想いを表現することが理想だ。しかしいわゆる難解句は、従来の常識的な創造方法から脱出するための実験過程としての存在価値を持っていた。詩の各ジャンル間に多少の差はあれ、いかにして、やさしく解り易いことばで、深い想いを表現してゆくかの方向へ、近年共に進んでいると思う。

以下私が推せんした五名の一句つつを——

たましいをこぼしながらも月の橋

西 山茶花

湿った海苔につきまといられる家族旅行

菊池俊太郎

迷路を脱けた笑い上戸の犬

土屋 桜子

春の絵に栖山行のバスも発つ

桐越 千絵

生き継いで冬蠟燭のあたたかし

西条 真紀

個性的な作家群に感銘

橘 高 薫 風

川柳Z賞は、回を重ねるにつれて応募者数も増え、喜ばしい次第であるが、受賞者が、やがて限定されて、たらい回しの授賞と感じさせることだけは避けたいものである。さて、第四回の選衡について選後感を述べると、結果は次の通りである。

- 一席 海地 大破
- 二席 古谷 恭一
- 三席 桑野 晶子
- 四席 菊池 俊太郎
- 五席 佐藤 岳俊
- 以下、 山本 礪、 樋口 仁の諸氏。

端的に言って、海地大破の作品は精神的に高く、古谷恭一のそれは心理的に深い。今後楽しみに作家と言えよう。

海地 大破
ふるさとへゆるりゆるりと腸が伸びたましいと旅を続ける油蟬

生き恥の限りを尽くし屋根の上

満月の猫はひらりとあの世まで

弓を引くかたちで骨になっっている

古谷 恭一

懺悔して流れていった大根葉

瓢箪の形に家族結ばれる

スプーンに映った僕の揺籃期

老夫婦揉藻のように生きている

英霊はベンギン鳥の如く立ち

大破は重にして真、恭一は尖にして雅である。一席、二席を高知が占めたことを偉とす

る。桑野晶子の作品は、爽快で天衣無縫である。主観、客観の調和がとれて、昨年より数等充実したと思う。

さんま焼く火のいろ駐車禁止地区

リラ冷えの肋に咲いたサンローラン

風花や写葉だったかあなただったか

ただし、

りんりんとゆく作品を

片 柳 哲 郎

- 一席 西 山茶花
- 二席 長町 一吠
- 三席 浜田 玲郎
- 四席 行本 みなみ
- 五席 武村 一美

言葉があつて焦点の呆けた最近の新鋭作家たちの中であつて、西 山茶花の作品を見てみると何かを語りかけてくるのを知る。その作品と読者との間の無限のドラマは確かに短詩形でしか言い表わせない広い、深いいのちがチラチラする。そこには時間などはなく、生きてきた、生きてゆくそれだけが美しく響く。なかでも

珠玉よと思ひ 露とも思ひ捧げ持つ
たれかれは火を焚く遊び 天の川
は、絶妙である。僕は受けとめる。
長町一吠の作品に劇しいものを押えた男の呼吸を見た。さきにも言ったように新鋭作家

を自称する人々の句は、理屈があつて夢がなく、妙にさめていてつまらないものが多い。「思い」が浅薄なのだ。長町さんの作品はそれらを超えた「己れ」が割れそうに揺れている。夫婦ろつそく離れ離れされた果に

など光彩を放つ。西 山茶花の夢幻の花びらに対して長町一吠には真実という花びらが舞い落ちる。

浜田玲郎は古い作品で埋めた。個々の作品には重畳感が乏しいが、読ませる要素を縦横に駆使している。この作家のよきは言葉というものを、自分なりに消化していることで、その結果が危うい表現がないというのである。遊離してしまった言葉がないのだ。それだけに他人に見せるための句となつてしまつたのだが、これは浜田さんの今後の課題となるであろう。

行本みなみの作品は力の充実を見せた。なによりも「想」が良い。さすがに後半はや、

「柿を剥くむいているのかむかれているのか」「するめ炙る耳を焦がして足を焦がして」など対句が目についた。プラスもあるが、マイナスも多い。

菊池俊太郎は都会派である。

がらがらの電車つかまるものがない

歪んだコップの歪んだ水を呑み干しぬ

二人がかりで縫い上げるトマトの傷

その他、軽いタッチで、革新派にありがちな深刻ぶるところのないのが良い。

佐藤岳俊は例年通り、寒村に格闘する風土人間を描いている。卓抜した作品はあるもの

の、素材を荒々しく提出しただけのものも多かった。

父の影立楯のまま仆れない

抱きあつて激し風化の道祖神

廃村の水精霊のホタル生まれ

山本礪は、ベテランの味がにじみ出て、悠悠としたタッチの作や遊び心を支えた句で楽しませてくれ、樋口仁は現代風俗を詠み、吉田花子の句とともに将来の指向を窺わせた。

吊革がきれいに並ぶラプソディー 仁

同封の蝶の生死をお知らせ下さい 州花

疲れの片りんを見せてはいるが、随所に行本みなみと言う作家を固守する姿が見えて好感を覚える。作家というものは常に、作品に敗れても何かに賭けるべき姿があるべきなのだ。それが今回の行本さんの作品群の中に認められた。

武村一美の一連は実は「甘さ」が目立つのである。その甘さを一句一句の丁寧な、心をこめた作句態度が押えたと言つて良いであろう。こういう作家は自分の一句を大切に取扱うことだろうと思つた。安直なストーリーをもつた一連ではあるが、作品に思いあがりがなく随所に飛躍も試みていて面白い。

他に金山英子、佐藤幸子、桑野晶子の作品が僕に迫つて来たが、それぞれに僕には致命的と言え、一、二句が目立ち推すことが出来なかつた。しかし

ここも化野ゴロンと転ぶふたぢぶさ 英子
振り返るたび瘦せてゆく寒立場 幸子
えんぴつが短かくなってゆく夜景 晶子
など、非常に印象を強くした作品であった。

第5回川柳Z賞・作品募集(予告)

- ▽作品 自由吟 三十句 六組
未発表。または、昭和60年以降の作品に限ります。
- ▽用紙 B4判(週刊誌見開き大) 原稿用紙をご使用下さい
- ▽賞 正賞 一名
準賞 若十名
秀逸 若十名
- ▽選考委員 委嘱中
- ▽参加料 不要。発表誌希望者は千円。切手代用は、五百円2枚か千円1枚にねがいます。
- ▽締切り 昭和六十二年一月三十一日
- ▽備考 他薦の場合は、本人の了解を得て下さい。
- 送付先 52青森県下北郡川内町浦町
-高田寄生木方
039 川柳Z賞選考委員会事務局
- 主催 川柳Z賞選考委員会

★「川柳秀句館」 時美 新子 編者
— 神戸新聞川柳壇の十年 —
新聞柳壇が、柳界の登竜門と言われていたが、全国紙の登竜門は、腰を低くしないと入れない状態であるが、地方紙の中でも、本島の東奥日報、神戸新聞などは、古くから川柳に紙面を大きく提供している。まさに、登竜門である。
新聞柳壇の雄「神戸新聞川柳壇」が、時美新子選になってから十年間の掲載作品四百四十三年を一冊にまとめられた。特選作品の評を読んでみると、作品の背景の中の作品を大きくつみこんでいる。選者のあたたかい服を感じる。
裏切りの鳩を育てている鏡 武邑鉄心
青春のはしごは二度と降りて来ぬ 万世人間の掌にあり薔薇のよく匂う 今井豊
駅裏にいつも淋しい雨が降る 和農夫
発行日 昭和六十一年七月五日
B6判 二五二頁 装丁 砂川しげひさ
頒価 二五〇〇円 送料 二五〇円
発行所 神戸市中央区熊内町7-4-15
メゾン橋本301 編集工房 円
郵便振替口座 神戸〇一四四四一

- 第一回国民文化祭川柳大会作品募集
▽とき 十一月二十日(日)午後一時
▽会場 東京都新宿区 日本青年会館
▽応募料 千円(郵便小為替) 誌堂
▽宿題と選者 各一旬
「最初」 渡辺 蓬夫
「円満」 野村 圭佑
「父」 尾藤 三柳
「人形」 磯野 いさむ
「進む」 西尾 栗
▽応募方法 二百字詰原稿用紙(B5判)かタテ型便箋。各題別紙。無記名。封筒に、住所、雅号、本名、年齢、性別
職業、電話番号記入ください。
▽応募先 356埼玉県上福岡郵便局
私書箱24号
国民文化祭川柳大会事務局
▽締切り 昭和六十一年九月二十日
▽最終選考 各題特選50句の中から、第二次選者団(5名)によって選出する
▽賞 文部大臣賞 東京都知事賞
国民文化祭川柳大会賞ほか
主催 文化庁・東京都
国民文化祭文芸部門実行委員会

北の角笛 70

樹 公 野 小

- 狂女 ふと 頬ずりをする 鉄格子
- 狂女 沈澱 その一味の 子守唄
- 万巻の匂い 狂女の脳動く
- 和尚対面 狂女の眼と眼と眼
- 狂女を取り巻く 人間共の様な猿
- 狂女 ホロ ホロりと謎を落し行く
- 狂女 地を見る 千変万化堀り起こす
- 狂女 訥々と本日振り分ける
- 賛美歌が迫り狂女に後がない
- 青空を千切る狂女の頬に問う

ちかめの風景 6

(租 相) 岩崎 真理子

海水浴の夢を見た。海に入って「ここでおしっこがしたくなる。そしてする。それがおねしょなのだ。やってみたいなあ。」夢ではない。もう意識は目覚めていた。温い床の中で、起きる事なく。きつと気持ちいいだろうと体は決断の瞬を待っている。GOサイン。寝てなんかいられるもんじゃな。後でこっそり、と思った私より先に、母がそーっと片付けてくれた。十歳の頃である。
おむつのとれた二男坊。仲間のおもらしを見て僕もとはかりスポンの上から、下水に向かってジョボジョボ。「ああ気持ち悪い。」と笑いこけている。身に覚えのある光景に「おヌシもか」絶句。
深刻なのは高校の頃。冬の寒い日、二時間かけての通学。学校を目前に粗相してしまった。一緒に居た友は優しく、さり気なく、暖かかった。その日から友のいる学校が少し好きになり、「異装願」なるものを出してスポンを穿いた。何よりの私の底の方で規則が変わりはじめた。